

# 総称文の意味論と差別論

水谷亮介(九州大学)

本発表の目的は、総称文の意味論的分析と差別論との関わりについて考察すること、および、総称文についての表出主義的意味論を提案することにある。

総称文とは、数量を明示することなく漠然と一般的な事柄を述べる文のことであり、例えば「カラスは黒い (ravens are black)」「アヒルは卵を産む (ducks lay eggs)」のような文がその典型例である。数量を明示した文、例えば「ほとんどのカラスは黒い (most ravens are black)」や「いくつかのアヒルは卵を産む (some ducks lay eggs)」などは総称文ではない。

総称文は、言語哲学の研究対象として興味深いだけでなく、差別論の観点からも注目を集めている。

## 1. 総称文の意味論と差別論との関わり

### 1.1 総称文の意味論

総称文が言語哲学の研究対象として興味深いのは、総称文を意味論的に分析するのが非常に難しいことによる。哲学・言語学において、最も広く受け入れられている意味論は、真理条件意味論である。真理条件意味論とは、文の意味を明らかにするためにはその文の真理条件を明らかにすればよいとする立場に基づく意味論である。真理条件とは、「真である (本当だ、そのとおりだ)」と評価されるために成り立っていなければならない必要十分条件のことである。例えば「The earth is round.」という主張に対して「そのとおりだ」と言えるために成り立っていなければならないことは、地球が丸いということである。つまり、「The earth is round.」の真理条件は、地球が丸いことである。このように、文の意味はその真理条件の観点から明らかにできるとされる。

しかし、総称文の真理条件を捉えることは難しい。なぜ難しいのかと言えば、総称文は、量に関する含意が一定ではなく、その意味するところが曖昧であるように見えるからである。例えば、文「犬は哺乳類だ」は、例外なくすべての犬が哺乳類であることを表している。他方、「アヒルは卵を産む」は、例外なくすべてのアヒルが卵を産むことを意味しているわけではない。現実にはたかだか半数程度のアヒルが卵を産むだけであるのに（卵を産むアヒルはメスのアヒルだけである）、「アヒルは卵を産む」は真と見做されるからである。さらに、「ダニはライム病を媒介する」に至っては、ライム病の病原菌を実際に保有するダニはダニ全体のたかだか数%にすぎないにもかかわらず、やはり真である。

このように、総称文は、量に関する含意が個々の文によって異なっており、したがってその真理条件も個々の文によって異なっているように見える。それゆえに総称文は、見た目の単純さとは裏腹に、意味論的に分析するのが困難なのである。

### 1.2 総称文の差別論

一方、近年では、総称文は差別論の観点からも注目を集めるようになってきている。総称文が「女性」「男性」「イスラム教徒」「黒人」「日本人」「韓国人」のような社会的カテゴリーについて用いられた場合に差別・偏見が助長される危険性が指摘されるようになってきたのである。例えば Haslanger

(2011)は、「女性は従順だ」「黒人は暴力的だ」のような偏見を表明するような発言が社会において繰り返されることで、社会の差別的構造が助長され永続化してしまう、と論じている。

総称文の意味論と総称文をめぐる差別論とは、基本的には別個の文脈で論じられており、両者の関係は必ずしも明らかではない。Haslanger (2011)の分析では、総称文の意味論は、差別論にとって間接的にしか関わってこないとされる。本発表では、Haslanger (2011)とは異なり、総称文の意味論的分析が差別論にとって直接に重要な役割を演ずることを指摘したい。

### 1.3 意味論が差別論に関わる二つの側面

私の考えでは、総称文の意味論的分析は差別論のもつ二つの側面において重要である。一つは、統計的事実を述べることで、総称文の主張に対する反論となるという点である。例えば「女性は数学が苦手だ」という総称文による主張に反論するためには、数学が得意な女性が女性全体の8割以上であるとか、数学が得意な男性よりも数学が得意な女性のほうが多いとかいうことを統計的事実として示せばよいように思われる。これは妥当な戦略であるように感じられるが、なぜこれが妥当な戦略であるのかについて理論的な説明はこれまでに与えられていない。総称文と統計的事実言明とは意味論的にはまったく異なる内容を述べていると一般に考えられている (Asher & Morreau 1995) にもかかわらず、なぜ総称文の反論として統計的事実を挙げることは有効なのであろうか。また、「数学が得意な女性が女性全体の8割以上である」という主張と「数学が得意な男性よりも数学が得意な女性のほうが多い」とはまったく異なるものだが、どちらも「女性は数学が苦手だ」という主張に対する反論として機能するのはなぜか。このように、総称文の意味論的分析は、差別的言語行為に対する反論としてどのようなことを述べればよいか、それはなぜかという差別論の問題を解くための大きな足がかりとなるのである。

もう一つは、総称文を用いることで偏見が助長されてしまう可能性である (Cimpian et al. 2010; Cappelen & Dever 2019)。心理学実験が明らかにしたことによると、人々は比較的弱い統計的証拠に基づいて総称文を受け入れる傾向があり、しかも、総称文からかなり強い統計的結論を推論するという傾向もある。すなわち、人々は、70%のKがFであると聞かされただけで総称文「KはFだ」を推論し、かつ、「KはFだ」と聞かされたときには90%のKがFであると推論する傾向にある。総称文は、根拠薄弱な主張を蔓延させる因子となりうるのである。この実験結果は、総称文が偏見の助長に寄与している可能性を示唆する。しかし、この傾向性が総称文が本質的に持っている意味に基づくものなのかどうかは、一見して明らかではない。それゆえ、総称文の意味論的性質と統計的事実との関係性を解明することは、偏見の助長を低減するための方策を考えるうえで、非常に重要になると考えられる。

以上のように、総称文にまつわる差別論を展開するうえでは、総称文に対して適切な意味論的分析を与える必要がある。

## 2. 総称文の意味論——従来研究

### 2.1 普通世界アプローチとその問題点

アッシャーとモロー (Asher & Morreau 1995) は、総称文の意味論を普通世界という概念に訴えて

構築することを試みている（彼らのアプローチを以下「普通世界アプローチ」と呼ぶことにする）。普通世界アプローチによる意味論は、次のように記述される<sup>1</sup>。

$$\llbracket \text{Gen } x [Kx] [Fx] \rrbracket^w = 1 \Leftrightarrow \forall x \in D: \forall w' \in N(w, \llbracket Kx \rrbracket): \llbracket Fx \rrbracket^{w'} = 1$$

荒っぽく言えば、この分析は、「KはFだ」の真理条件は、「どの個体xについても、xがKであるならば、普通、xはFである」ということだ、という分析になっている。総称文を、一種の全称文として理解するのである。この意味論だと、「カラスは黒い」とは「どのxについても、xがカラスであるならば、普通、xは黒い」という意味だということになる。確かにこれは直観に適う。アルビノのカラスのように黒くないカラスが存在するにもかかわらず、依然として「カラスは黒い」が真であるのはなぜかが、うまく説明できるからである。

しかしこの意味論には欠陥があるとの指摘が為されてきた。レスリーによれば、普通世界アプローチは、「アヒルは卵を産む」のような文の意味を適切に予測することができない。普通世界アプローチによると、「アヒルは卵を産む」が真であるということから、「アヒルはメスである」までもが真であるという予測が成り立ってしまうのである。このことは、次のように考えると分かる。いま、「アヒルは卵を産む」が真であると仮定する。このとき普通世界アプローチによれば、どのxについても、xがアヒルであるならば、普通、xは卵を産む。卵を産むのはメスだけであるから、そうすると、どのxについても、xがアヒルであるならば、普通、xはメスである、ということになる。普通世界アプローチに基づけば、結局、「アヒルはメスである」が真であることになる。だが、これは直観に反する。

## 2.2 レスリーのアプローチとその問題点

レスリーの考えでは、総称文の意味論は単に引用符解除的であるべきである。つまり、総称文「KはFだ」が真であるための必要十分条件は、KがFであることである、とレスリーは言う。しかしこれだけではほとんど何の説明力もないように見える。そもそも総称文の意味が不明瞭であるのに、当の総称文を用いて真理条件を記述してしまっているからである。にもかかわらず、なぜレスリーはこのような考えるのか。

レスリーによれば、総称文は「認知システムが持つ一般化の際のデフォルトモード（the cognitive system's default mode of generalizing）」（Leslie 2008: 23）と関係している。「認知システムの一般化の際のデフォルトモード」とは、生まれながらにしてヒトの脳に備わっている基本的・原始的な情報収集メカニズムのことで、このメカニズムがはたらくために、われわれヒトは少数の例の観察から一般則を導く傾向を持つとされる。レスリーは、ある人が「KはFだ」と判断するとは、その人の認知システムが性質Fを種Kに一般化するというにほかならないのだと考えている。

総称文の真理条件が複雑で曖昧に見えるのは、この認知システムの働きの複雑さに起因する。この

<sup>1</sup> ただし各記号の意味は次の通りだとする。 $\llbracket \cdot \rrbracket$ は、可能世界に相対的に、文を引数として真理値を返す関数である。 $\llbracket \cdot \rrbracket$ は文を引数として命題（＝文を真とする可能世界の集合）を返す関数である（つまり、 $\llbracket \phi \rrbracket = \{w \mid \llbracket \phi \rrbracket^w = 1\}$ ）。Dは議論領域である。Nは、世界と命題とを入力すると、その命題が成り立つときにその世界から見て普通成立していることがすべて生じている世界の集合を返す関数である。また、 $\underline{x}$ は、対象xの名前を表す。また、総称文は一種の量化表現であるという通常の統語論的仮定に基づき、総称文の論理形式は「Gen x [Kx] [Fx]」で表すことにする。

複雑さを意味論に取り込もうとしても、うまくいかない。そのためレスリーは、総称文の意味論は引用符解除的であらざるを得ないと考えているのである。

### 3. 表出主義

しかし、総称文の意味をもっと素直に捉えることはできないのだろうか。私は、真理条件意味論に代わる理論として、表出主義 (expressivism) という立場を採用することを提案したい。

表出主義とは、文の意味を、その文の発話によって表出される心的状態によって捉えようとする言語哲学上の立場のことである。表出主義はもともと「よい」や「べき」などの価値語・規範語に対し、真理条件意味論に代わる理論として提案されたものだが、価値語・規範語だけでなく、総称文についても、表出主義的分析が有効であると私は考える。

表出主義によれば、一般に、「 $\phi$ 」という発話で表出される心的状態は、「 $\phi$ という判断」である。したがって、文「 $\phi$ 」の意味を説明するためには、「 $\phi$ という判断」がどのような心的状態なのかを説明すれば十分である (Gibbard 2003)。

さて、レスリーは総称文とそれに関連する認知システムについて考察する際、基本的に「『KはFだ』と判断するとはどういうことか」を考えている。この意味で、レスリーは表出主義的な考察を行なっている。さらに、実は「表出 (express)」という言葉もレスリーは使っている。

もし、種Kに関する知識や経験によって話者のデフォルトメカニズムが性質Fを種Kに一般化するならば、話者はこのことを総称文「KはFだ」によって表出するだろう。(Leslie 2008: 22)

この一節は、実質的に、表出主義による総称文の意味の考察になっていると言ってよいであろう。

このように、レスリーの考察は実質的に表出主義的である。だとすれば、真理条件意味論ではなく表出主義を採用することに躊躇する理由はない。そして表出主義を採用するとき、まさに上の一節によって、総称文の意味は明らかにされたと言える。レスリーのように、真理条件意味論に拘って引用符解除的な意味論を採用するようなことは、せずともよい。

### 4. 今後の課題

統計的事実と総称文の意味との対応関係について表出主義の観点から明らかにすること、そしてそれによって、総称文にまつわる差別論を十全に展開することが、今後の課題である。

### 参考文献

- Asher, Nicholas & Morreau, Michael (1995). What Some Generic Sentences Mean. In Greg N. Carlson & Francis Jeffrey Pelletier (eds.), *The Generic Book*. University of Chicago Press. pp.300-339.
- Cappelen, Herman & Dever, Josh (2019). *Bad Language*. Oxford University Press.
- Cimpian, Andrei; Brandone, Amanda C. & Gelman, Susan A. (2010). Generic Statements Require Little Evidence for Acceptance but Have Powerful Implications. *Cognitive Science* 34 (8):1452-1482.
- Gibbard, Allan (2003). *Thinking How to Live*. Harvard University Press.
- Haslanger, Sally (2011). Ideology, Generics, and Common Ground. In Charlotte Witt (ed.), *Feminist Metaphysics*. Springer Verlag. pp.179-207.